

Schäfer 教授と故 Adams 教授

文學博士 三 浦 周 行

歐米にある二學友から私の最近に受取つた書信は一は慶すべく、一は弔すべき斯界の好消息を含んで居る。其一つは文部省在外研究員なる小樽高等商業學校教授寺田貞次氏から伯林大學に於けるセーファー教授の八十歳記念講演に關して寄せられたものであるが、原文の儘左に抄出する。

(前略)目下伯林大學で聽講致して居ります。地の學の教室は本館外 Meereskunde Museum の樓上なる Geographische-Institut では御座りませうけれども、Historische Geographie にも趣味をもつて居りますので、Vogel 教授の講義及び Vorträgen に出席致し、又 D. Schäfer 教授の講演をも拜

聽致して居ります。Schäfer 教授の講演は百四十番、Vogel 教授のは百十九番の普通教室と Historisches Seminar の室々で、何れも史林(第八三號頁)で御紹介下さつた室でありますので、一入の感にうたれ、先生御來歐の當時を追懷致して居ります。D. Schäfer 教授は既に御退隱ではありますけれども、一週に一度(本曜の午後六時から七時迄)づつ全聽講生の爲めに Public で講演されます。本學期は Der Rhein, Deutschland und Frankreich と云ふ題で話して居られます。殊に本年は教授八十歳の記念講演にも相當致しますし、又御講演が獨國の重要問題でもありますので、旁聽講

者は非常に多く、百四十番の大講堂に充満の盛況を呈して居り、準備員に依つて古いライン沿岸の地圖もかゝげられ、助手とも思はれる人から御講演に關する紹介がすみ、愈々教授の入場となると、聴衆は一時に足踏をして大歓迎をやる。教授如何にも嬉し氣に演壇にのぼられる。過日の如き、聴講の一婦人は美しい花束を教授に呈しました。其師弟の美しい感情のあらはれを觀、愉快の感にうたれました。拜顔する處、教授は頭髮、御髭共に未だ夫れ程白くもなく、八十歳の御高齢とも思へぬ元氣さ、堂々と講演される處は、聴衆をして感深からしめます。然し御高齢の加減にや稍御聲が低いので、聴衆中には耳に手して熟聽して居るのをも見受けましたが、御聲の低い處、其處に又一種の妙味がある様にも考へられました云々。

今から三年前私が伯林大學をおとづれた頃は、

生憎暑中休暇に入つた後であつた爲めに、期待したセーファー教授の聲咳に接する機會をも得なかつたが、同大學の史學研究室は、獨逸に於ける私の最初の視察であつた丈に、長時間に涉つて仔細に見學した後、ふと講堂の入口に近く、ダイレクタールとしてのセーファー教授の大理石の胸像を見出し、更に其臺木に刻んだ

Dietrich Schifer

Dem Forscher, Dem Lehrer,

Dem Deutschen Mann.

この獨逸國史界の一大權威なる教授に取つて寔にふさはしい象徴的な銘文を讀下した時、暫く立ち盡くして衷心の敬意を捧げたのである。今寺田學士の見ることが如きスケッチに接して、坐ろに當年の記憶を喚起こし乍ら、愛國の情熱に燃ゆる老教授の風采と講壇の下に集まる若人の群とを思浮べた。

今一つは亞米利加エール大學助教朝河貫一氏から米國史界の耆宿で、歐洲の中世史殊に英國憲法史の泰斗なる同大學のアダムス教授の訃音と共に、同氏個人として深く同情すべき遺瀨なき衷情を告白された通信である。

(前略)却說當地御來遊の時御面會なされしアダムス教授は、五月二十四日永眠せられ候。弘く英米兩國にて悼まれ候。殊に小生は同氏の發意によりて、その後を承けて歐洲中世法制史を受け持ち居り候のみならず、廿餘年、師とし友として永眠に至るまで親交を賜はりし人に候間、大に落膽仕候。討議し獎勵する人を全く失ひ、他には此方面に此程の人は當地に之なく、失望此事に候。殊に學問以外、個人として、氏の寡言誠實は、他に多く比類之なく、氏の死去により小生の嘗て豫想せざりし空虚を胸中に生じ候云々。

私がアダムス教授に遭つたのは大正十一年十一月の半、ニュー・ヘヴンで一週日を送つた頃のことである。豫めて専門の關係から教授に對して一種の親しみを有つて居た私は、朝河氏から更に教授がセミナルの指導振に於て一大天才であると聞かされたので一夕同氏と相携へて、エツヂ・ヒル・ロードの物寂しい隱栖を訪うた。嚴格なる指導に門下の女學生を泣かせたとの挿話杯が加味された私の想像は美事に裏切られて、教授は瘦せぎすではあるが、古稀よりは十歳も若く見える温顔親しむべき老紳士であつた。朝河氏が、これも人好きにする老夫人と談笑の間に、私の問ふが儘、言葉寡なに而かも懇愼に答へられた談片は、私が嘗て本誌(第八卷第四號掲載「最近歐米史界管見」)に紹介した通りである。其後程なく私は同大學史學部教官の會食に陪席したが、教授も來合せられたから暫し言葉を交はした。食後私といふ外國人の居る

前で史學部の學制改革についての協議が始められ
先づ若い一教官から可なり突飛な改革案が提出さ
れると、各教官の質問應答がひとしきりはづんだ
耳の遠いアンドルース部長等と一隅に掛けて居ら
れた教授は黙々として一語をも發せられなかつた
が、其中に一教授から教授を名指して其在職中の
事を尋ねられると、只一語、よくは記憶せないと
軽く受流されたところに、今は退職の身の控目に
どの用意のほの見えて床しかつた。それが私の教
授を見た最後であるが、後日私が華盛頓にカーネ
ギー研究所の歴史部を訪うて、部長ゼームソン教
授から、同部の史料蒐集事業に關する親切なる説
明を聴取つた上に、アダムス教授等の斡旋に依つ
て創刊されてから、二十年餘りも編纂主任を續け
られて居るアメリカン・ヒストリカル・レヴューの
編輯經營振についての委曲を悉くした答辭に接し
又亞米利加史學協會の種々の印刷物の寄贈をも受

けたのは、全く教授の紹介の賜物と感謝に堪へ
ぬ。

其頃の教授はエールの法學校で、少時間法制史
の講義を續け乍ら専心著述に従事されて居ると聞
いた。教授の英國憲法史は造詣の最も深かつた丈
に英國の大學でも採用されて居るのを私の滯英中
に目撃した。教授の遠逝が本國と同様、英國でも
痛惜されたのは當然である。今近着のアメリカ
ン・ヒストリカル・レヴュー七月號から、教授の心
友ゼームソン編纂主任の筆かとおぼしき簡潔で而
かも情誼の濃やかな追憶記を借りて、此學識人格
の高い史家の片鱗を偲ぶよすがとしやう。

エール大學の名譽教授ジョールヂ・バルトン・ア
ダムス博士は五月二十六日(朝河氏の書信に
は廿四日とある)七十四
歳に垂んとして逝去された。氏は一八七七年か
ら一八八八年迄はドルリー・カレッヂ、一八八八
年から一九一七年、氏の退職迄はエール大學の

史學の教授であつた。氏の立派な處女出版は『中世の文明』(一八九四年)であつて、引續き『佛蘭西國民の興隆』(一八九六年)、『歐羅巴史綱要』(一八九九年)が刊行された。併し氏の最も得意としたのは英國憲法史殊に十三世紀のそれであつて、ハント及びプールの『英國政治史』の第二冊(一九〇五年)即ち一〇六六年から一二一六年迄のものど『英國憲法の起源』(一九一二年)とハスキンス教授監修ホルト出版の叢書(亞米利加歴史叢書の事)中の『英國憲法史』(一九二一年)との著者である。十三世紀の憲法史に關する氏の考察は屢々本誌の研究欄で先づ發表されて、一般の承認と多少の反對とを受けたことであるが確かに識見該博で論旨も透徹であつた。氏は一八九一年から一八九七年迄と一八九八年から一九〇一年迄と亞米利加史學協會の評議員會の委員であつて、一九〇八年には協會の會長であつ

た。一八九五年に本誌が創刊されてから、一九一三年迄は引續き編纂委員會の議長であつた。氏は其正しい判斷、知識、及び他とのあらゆる交渉に於ての熟慮、屈竟なる精力及び常識に依つて、協會の困難な時代に、評議員會に向つて非常の援助を與へられた。別して本誌創刊以來の數年間氏の持前の如上の特性と慎重で且つ獻身的な努力とに負うたところは、現在一般の想像以上に多大なものである。氏は高潔の士であり、親切の友であつた。